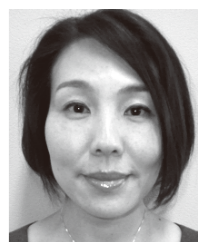


行政医師としての一歩



宮崎県高鍋保健所
兼 中央保健所主幹
上谷 かおり

平成9年、宮崎医科大学（現宮崎大学医学部）卒業。第3内科（現神経呼吸内分代謝学）に入局、内科、呼吸器内科医として病院勤務を経て、平成28年2月、宮崎県庁に入庁。同月より現職に至る。内科学会専門医、睡眠学会認定医、ICD、日本医師会認定産業医。

卒業後、臨床を続け、患者さんに寄り添いながら成長した18年間でした。なぜ行政医師としての一歩を踏み出したのか、正直、大きな目的や目標をもっていったわけではありません。自分でもその理由を探す毎日ですが、結核、食中毒、高病原性鳥インフルエンザ、精神疾患対応、動物愛護、産業廃棄物など保健所が抱えるさまざまな問題に直面し、公衆衛生が地域住民に果たす大きな意味と役割を感じています。

行政医師になるまで

私は宮崎県で生まれ育ち、県外に出たことがない生粋の宮崎県人です。小学生のころ「ひまわりの歌」というドラマが大好きで、宇津井健さん演じる弁護士にあこがれていました（当時9歳だったことを考えるとかなり好み）。しかし、高校では理系に進んでしまい、宮崎医科大学に平成3年に入学しました。弁護士も医者も方法が異なりますが、人を助ける、という意味では、小さいころの夢はかなったように思います。

卒業後は母が間質性肺炎を患っていたこともあり、当時、宮崎では専門医が少なかった呼吸器内科医をめざすことにしました。途中、出産・育児で4か月ほど休みましたが、家族や職場の協力もあり、常勤で勤務し続けることができました。家事や子どもの世話など、母に頼りっぱなしで仕事をしていましたが、平成25年4月、間質性肺炎から悪性リンパ腫を発症した母を、自宅で看取ったあと、しばらく空虚な気持ちで時を過ごし、体調も崩してしまいました。しかし元気で仕事ができて社会に貢献できるのもあと20年、折り返し地

点だと考え、転職して何か違うことをやってみようと思い立ちました。インターネットや転職サイトで県内、県外の転職先を模索する日々が2年ほど続き、平成27年、真夏のある日、宮崎県庁ホームページで行政医師募集のお知らせを見て、「よし、これだ!」と、猪突猛進、すぐさま県庁の福祉保健部に電話をしました。担当の方々は、突然でびっくりされたと思います。面接のときには「保健所のイメージは?」と問われ、しどろもどろに結核や乳児健診の話など「超」がつくど素直な回答をしたものです。お恥ずかしい話、保健所をよく知らないまま宮崎県庁に入庁し、そのまま高鍋保健所に勤務することとなりました。

国立保健医療科学院での研修

一介の勤務医だった私がいきなり経験豊富な方々を前にして机に座ることになり、当初はとても居心地が悪く、どこかよそ者のな気持ちでいっぱいでした。そんな2か月を過ごし、平成28年4月から7月まで埼玉県和光市にある、国立保健医療科学院（NIPH）で、保健福祉行政管理分野分割前期の研修を受けました。

公衆衛生のスペシャリストの講義を受けられたことは毎日刺激的であり、公衆衛生の奥深さを学ぶよい機会でした。同期の方々は30歳代から60歳代まで経歴もさまざま、時に飲み交わしながら交流を深め、いまでも学会や研修で集まっては近況報告したり、夢を語ったりしています。すばらしい仲間に出会えたことも研修の収穫

の一つでした。

その後、社会医学系専門医制度が始まることやNIPHが人材育成に力を入れてくださっていること、宮崎県の協力を得られたこと、なにより自分自身の資質向上のため、分割後期を3年かけて履修することにしました。遠隔研修や短期研修を受け、単位を取り、特別研究論文も書かないといけません。自分に課した重い荷物を途中でほ

うり出すことのないよう精いっぱい頑張っていきたいと思っています。

最近の座右の銘は「石の上にも三年」です。

高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の洗礼を受けて思うこと

さて、私のドクター人生でまさか鳥フルに戦々恐々とする日が来

るとは思いませんでした。宮崎県は過去、平成23年に13例（約百万羽）、平成26年は2例（約4万6千羽）のHPAI対応を経験しています。高鍋保健所管内は県内有数の畜産業が盛んな地域で、平成22年には口蹄疫が発生した地区でもありましたので、全国のニュースを見ながら鳥フル発生におびえる日々でした。そして、年末年始が近づ

く中、平成28年12月X日Y時ごろ、その第一報がもたらされました。「管内の養鶏場の鶏が簡易検査で陽性だったらしい!」。そのとき私は結核コホート研修に参加しており本庁にいましたので、連絡をもらってすぐ高鍋保健所に戻りました。

Y+4時にPCR検査を行い、Y+13時から作業者の健診開始、Y+

15時から作業開始との連絡があり、そこからばたばたと動き始めました。保健所は主に作業従事者の健康管理とPPEの着脱指導を行いました。今回の発生養鶏場は飼育羽数約12万羽、周囲には養鶏場が密集しており、制限区域内の羽数は、合計約562万7千羽にも上りました。発生養鶏場への動員数は1084人、健診者数は計1147人、自衛隊、市町村の協力をいただきながら、作業を順調に進めることができました。殺処分開始から夜通しかけて20時間で防疫措置完了という驚異のスピードで終了しました。HPAIの洗礼と書きましたが、私にとって今回のHPAI対応は、ほんやりとしていた行政医師としての自覚が芽生え、平時の準備や関係機関との連携の大切さを実感し、何より職員の皆さんとの仲間意識が高まったように思います。今後、自分に何ができるかわかりませんが、何事も平常心で冷静に対応する力を身につけ、地域住民のために残りの医師人生を捧げたいと思っています。



作業従事者の健診の様子。作業後は疲れ切って帰ってこられます。ねぎらいの言葉をかけるように気づきました



PPEの点検の様子。作業は夜通し行われ、衛生担当者つきっきりでPPE脱着の指導をしました